

〔古今著聞集二十一〕魚虫禽獸 宮内卿なりみつ卿のもとに盃酌の事ありけるに、すびつの邊ににしをおほく取置たりけるに、亭主酒にえひて、其すびつを枕にして、ね入にけり。其夜の夢に、ちいさき尼の數おほく、すびつの邊になみゐて、めんくになきかなしみて、さまぐくどきごとおけり。おどろきてみれば、物もなし。又ねいれば、さきのごとくに見ゆ、かくてたびくになりけれども、おほかたその心をえぬに曉にのぞみて、又目をもてあげて見るに、にしの中に小尼せうくまじりて、うつ、に見へて、やがてうせにけり。おどろきあざみて、それよりながくにしをばくはざりげり。

〔散木弃謡集九〕あるあまのくちあしとて、もの、くはれぬに、じといふものこそ、思ひ出らるれといひけるを聞いて、もとめてくはせけるに、からみといへる所は、からしとて、くはざりければよめる。

よしとおもふ心のねがふにしなればからみ成ともまいらざらめや。

〔令義解三役〕凡調略○中 正丁一人、絹絶八尺五寸○中 若輸雜物者○中 辛螺頭打六斗。

〔四條流庖丁書〕一蟻ヲ折ニ積ベキ事、蟻ノ蓋ノ方ヲ下ニナシテツムベシ○下

〔房總志料三上〕總附錄 螺の類にからにしといふものあり、大き拳の如し殻の内赤色腸の尖れる所に水あり、其味甚辛し、蕎麥を嗜る人蘿蔔汁に易用ゆ。望陀市原の海邊にて甚珍とす。

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕三獻○中 御ゆづけ○中 にし。

〔祇園會御見物御成記〕三獻○中 あへませ○中 にし。
〔本朝食鑑十〕長螺○中 きそく金

〔本朝食鑑十〕長螺○中 仁之

釋名、香螺、本草夜啼螺、或稱邊蟲。多禮、又云海鳥、俗稱小兒夜啼不止、長螺一箇置小兒之枕邊、誓曰、汝不治

鳥螺乎、擬鷗。謂之夜啼、則破殼拔肉棄于野、若治之則放于江海、於是夜啼必止、故俗名之乎、海